

Matthias Theodor Vogt 30.10.2023

<https://www.pizzicato.lu/welthauptstadt-der-neuen-musik-donaueschingen-2023-ein-wunder-in-der-tiefsten-provinz/>
<https://www.giornaledellamusica.it/recensioni/capitale-mondiale-della-nuova-musica-donaueschingen-2023>

マティアス・テオドル・フォクト

ドナウエッシンゲン 2023 年、新音楽の世界首都： 小規模都市の奇跡

毎年 10 月の第 3 週末、人口 2 万 2 千人の南ドイツの小さな地方都市が、ニューミュージックの世界首都に変貌する。ドナウエッシンガー・ムジークターゲのオーケストラ・コンサートには、毎回 1000 人以上の観客が訪れる。(ベルリンやミラノの規模に換算すると、人気のないシリアス・ミュージックの分野での初演には、想像を絶する 10 万人の観客が訪れることになる)。2023 年、10 月 19 日から 22 日にかけて、33 カ国から 6,500 人が集まり、17 のイベントに合計 7,800 席が使われた。無料で公開された多くのインスタレーション、ガイドツアー、ディスカッションはカウントされていない。このような奇跡が、この奥深い地方で可能なのだろうか？

比類なき伝統

一方では、比類なき伝統がある。1921 年、芸術を愛する王子と音楽監督のハインリヒ・ブルカールは、「現代音楽芸術振興のためのドナウエッシンゲン室内楽演奏会」を創設した。すぐにヒンデミット、ストラヴィンスキー、シェーンベルク、ベルク、ヴェーベルンなどの作品を初演し、国際的なマスコミを魅了した。1924 年、ニューヨーク・タイムズ紙は、「ドナウエッシンゲンの音楽祭は、世界でも類を見ない」と書いた。トーマス・マンの特徴的な言葉を借りれば、『ファウストゥス博士』（1947 年）は、「バーデンのフェスティバル会場”での”新しい精神的態度”と、そこで”芸術的な『共和主義者』を意識した観客”と出会った”豪華で音楽的に完璧な演出”を想起させる。芸術における出発の思想は、ついに共和制となった政治的なドイツにおける出発の思想と並行して、1921 年から 26 年にかけてドナウエッシンゲンにその場を見出した。1927 年、芸術祭はバーデン・バーデンに移ったが、1933 年からは NSDAP がドナウエッシンゲンを自らの目的のために乗っ取った。1946 年にドナウエッシンゲンが共和制の伝統を取り戻すことができたのは、ドイツ南西部の根本的な文化的・政治的刷新に成功したフランス占領下のことだった。つまり、2023 年は、時折喧伝されるような第 103 回大会ではなく、むしろ 103 年ぶり 84 回目の大会だったのである。

強力なパートナーとしての Südwestrundfunk

その一方で、最も辺鄙な地方でこの奇跡を可能にしている、特別に強力なパートナーがいる。1949 年、「音楽友の会 (Gesellschaft der Musikfreunde)」は、スュードヴェスト管弦楽団 (現在のスュードヴェストルントフンク) と安定したパートナーシップを築いた。スュードヴェストルントフンク交響楽団は、四半世紀にわたって、世界のどのオーケストラより

も最新の音楽を初演することに特化し、そのメンバーたちは、作曲家たちの不可能とも思えるような要求にも尻込みしない。

日米の作曲家スティーヴン・カズオ・タカスギは、「シュタイングレーバー・トランスポンダー・ピアノ、オーケストラとエレクトロニクスのための協奏曲」を日本の「間」の哲学、ネガティブ・スペースに基づいて作曲した。インゴ・メッツマッハーが SWR 管弦楽団に、小節の始めに 32 分音符を数個ずつ拭うような動きをさせた後、SWR 管弦楽団を動かなくさせた。エルンスト・ユンガーの『In Stahlgewittern [In storms of steel]』（1920）から 100 年を経て、好戦的な男らしさの幻想から音楽が目を背けるのを助けることができた。

同じ最終演奏会で、SWR 管弦楽団は「女よ、なぜ泣いているのか？ 汝は誰を捜しているのか」（ヨハネによる福音書 20 章 15 節）。6 分以上も聴いていたくなるような素晴らしい音。パグ＝パーンは、「苦悩に泣く人が勇気を取り戻し、生きる力を見出すための実存的慰め」に作品を捧げた。

ドイツ文化連邦主義におけるコラボレーション

地方における奇跡は、ドイツの文化的連邦主義によっても説明できる。ここでは、あらゆるレベルがダイナミックに連携している。1806 年まで、ドナウエッシンゲンは、今日のドイツの他の 300 の小さな地方都市と同じように、主権国家の首都だった。その居住用の宮殿と公園が、この町に大きな風格を与えている。今日、フルシュトリッヒ・フルステンベルク醸造所からの寄付金は 3,000 ユーロ（予算 90 万ユーロの 0.3%）。ドナウエッシンゲン市は現金と物資で予算の 13% を、バーデン＝ヴュルテンベルク州と連邦文化財団はそれぞれ 30% 弱を、そして来場者はチケット販売で 10% を負担している。



図 1: ヴォイテク・ブレチャルツ: 交響曲第 3 番における王子と芸術家。3。
ドナウエッシンゲン音楽祭 21.10.2023. 写真: マティアス・テオドル・フォクト

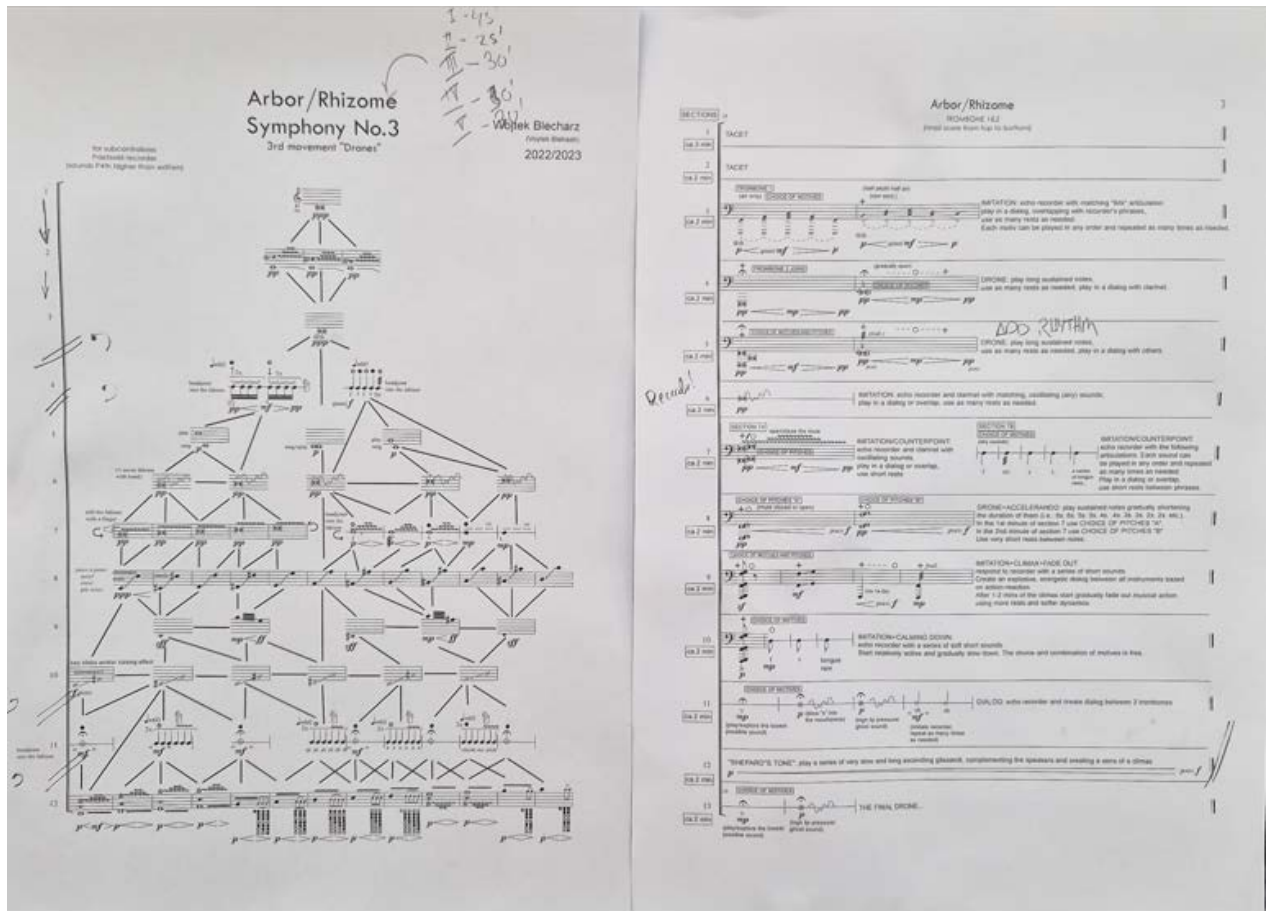


図2: ヴォイテク・ブレチャルツ: 交響曲第3番。3、第3楽章「ドローン」(2023年)。
 コントラバスクラリネットとサブコントラバスリコーダー(左)とトロンボーン(右)のためのパート譜。
 PHOTO: SWR

SWR オーディオ・ストリーミングによる世界中のリスニング・オプション

ドナウエッシンゲンからの 240 分のテレビ放送と何時間ものラジオ放送という点で、Südwestrundfunkは文化連邦主義の大きな勝者である。少なくとも、ドイツの公共放送システムにおけるテレビ放送1分あたり約10,000ユーロのコストという点では、SWRのMusic Daysにおける20%の予算シェア(17万5,000ユーロの直接コストと約300万と推定される放送経費)に対して、Südwestrundfunkは大きな勝者である。

しかし、より正確に言えば、長期的な協力関係から利益を得るのは、放送会社ではなく、ドナウエッシンゲンのほるか彼方にいる観客やリスナーなのである。例えば、イランの作曲家エルナズ・セイディーの音の美しさはここで聴くことができる。

(2023年10月21日のオーケストラコンサート1は <https://www.youtube.com/watch?v=71GblUnFpvQ>。
 2023年10月22日の最終演奏会は <https://www.youtube.com/watch?v=THMbfHnyyZw>。
 レポートは <https://www.ardmediathek.de/video/swr-kultur/swr-kultur-vom-15-10-2023/swr/Y3JpZDovL3N3ci5kZS9hZXgvczE5MzkyMzg>、15分53秒から。)

ドナウエッシンゲンの「ネクスト・ジェネレーション」プログラムでは、ヨーロッパの音楽アカデミーの学生たちがコンサートに参加し、インタビューやディスカッションを体験し、作曲家自身との対話に参加することができる (<https://www.swr.de/swr2/musik-klassik/donaueschinger-musiktage/next-generation-das-nachwuchsprogramm-der-donaueschinger-musiktage-100.html>)。

ドナウエッシンゲンの活気ある市民社会

外から見ると地方のように見えるが、内部では極めて活発な市民社会が存在し、それがミュージック・デイズに不可欠な要素である。この地域の団体の密度は、住民 75 人につき音楽、文化、スポーツの分野の団体が 1 つである。平均すると、住民一人当たり 2 つの団体に参加していることになり、その結果、非常に密度の高い一体感のネットワークが形成されている。これは、4 人の住人がいる各家から結社のノードまで 8 本の線を引き、すべての人と他のすべての人をつなぐネットワークで視覚化することができる。しかし同時に、これはドナウエッシンゲン音楽祭が、ノイエ・ムジークを愛する人々の間に毎年世界中にネットワークを広げていることと正確に対応している。

このドナウエッシンゲン州の "帰属意識" に沿うように、ダイムラー、ポルシェなどの自動車供給で世界市場をリードするドナウエッシンゲン州の経済は、コロナ・パンデミックを無傷で乗り切った。留学を終えてこの地に戻ってきた若者も多い。その結果、市や区の財政状態も良くなっている。一方では、現代美術館やゲーム博物館、1868 年当時のまま保存されているフルシュトリッヒ・フルステンベルクのコレクションなど、一年中人々が集うアゴラとして芸術を提供することができ、他方では、改築や広場の設計に成功し、真に都市的な空間を創造することができる。不思議なことに、ミュージック・デイズのメインホールのひとつであるドナウ・ホールのバルトーク・ホールは、月に一度、牛の市場に使われている。

新芸術監督のリディア・リリングは、シュヴァルツヴァルト = バール地区の住民のアクセスを容易にするため、12 ユーロのチケットを導入した。(EU 憲章第 21 条に抵触する可能性がある。この条文は居住地による積極的差別を禁止している。)



図3 フュルステンベルク王子のドナウエッシンゲンでのコレクション。

左の写真は、世界で唯一保存されている、カール・フォン・ドライス作の三輪足踏み車。

[カール・フォン・ドライス作 (1820年頃)。写真 マティアス・テオドル・フォクト

シリアスな音楽」は常にシリアスでなければならないのか?

ノイエ・ミュージクは、「シリアス・ミュージック」（娯楽音楽とは異なる）という名称が示すように、深刻な問題を抱えている。

王子一家は、ミュージクターゲが使用するために、城のオランジェリーを提供した。ここでは、日本人の彫刻家・中島理恵（横浜、現ロンドン）と打楽器奏者・作曲家のピエール・ベルテ（ベルギー、リエージュ）が、日用品から楽器を開発し、来場者が椅子に座ると音が鳴り始める。

図4

ビデオファイル 中島・ベルテ 20231020_150303

中島理恵 & ピエール・ベルテ

死んだ植物と生きているオブジェ

オランジェリーでのインスタレーション、ドナウエッシンゲン音楽祭 20.10.2023

ビデオ マティアス・テオドル・フォクト



図5.

ビデオファイル 中島・ベルテ 20231020_150451

中島理恵 & ピエール・ベルテ

死んだ植物と生きているオブジェ

オランジェリーでのインスタレーション、ドナウエッシンゲン音楽祭
20.10.2023

ビデオ マティアス・テオドル・フォクト



ムジークターゲの枠組みの中で、リビング・オブジェは、確かに、音楽が来場者自身の活動によってのみ鳴り響く、ほとんど唯一の貢献であった。ヴォイテク・ブレチャルツ（ワルシャワ、ベルリン）の交響曲第3番では、聴衆はホールの中を歩くことができた。このフェスティバルの残りの期間、聴衆は伝統的な受動的形態に囚われていた。

エストニアのアーティスト、ラウル・ケラー（タリン）は、同じくオランジュリーで、大きな青い風船を部屋と見事なシンメトリーに設置し、常に柔らかく変化する音楽で風船を鳴らした。鑑賞者が耳を風船に近づければ近づけるほど、風船の共鳴が聞こえ、空間音が変化していく。

図 6.

Videofile Raul-Keller_20231020_160710.mp4

ラウル・ケラー

ライト・オレンジ・インターヴェンション

オランジュリーでのインスタレーション、ドナウエッシンゲン音楽祭 20.10.2023

ビデオ マティアス・テオドール・フォクト



ドイツ系オランダ人の作曲家アイリス・テル・シフォーストとドイツ人作家フェリシタス・ホッペ（ともにベルリン出身）は、新しい音楽は必ずしもシリアスに沈む必要はなく、非常に生き生きとした芸術的な遊びにも発展しうることを示した。彼らの作品 "What is actually playing here?" は、アンサンブル・アスコルタのシリーズ "Echo Chambers" の一環として委嘱された。は、アンサンブル・アスコルタのシリーズ「エコーチェンバーズ」の一環として委嘱された。この作品は、歌手（サロメ・カンマーだけでなく、音楽性の高いフェリシタス・ホッペの共演も素晴らしい）、同じくプロフェッショナルなアンサンブル・アスコルタ、そしてエレクトロニクスのために作曲された。残念ながら、そのタイトルはいささか平凡なものだった。実際は、音楽クリエイター、言葉クリエイター、サウンドクリエイターの対等なコラボレーション--今年の Musiktage の重要な課題--についての二人の著者による美しい談話である。この問いかけに、女性作家たちは「Yes, it can be done! 文化史の陽気な散策となった。Oh Du lieber Augustin, Alles ist hin!」から始まり、モンテヴェルディの『エウリディーチェ』からコントラバスの『三人の中国人』まで。[ああ、親愛なるアウグスティヌスよ、すべてはむなしい!]。] モンテヴェルディの『エウリディーチェ』へ。コントラバスを持った3人の中国人』を通り過ぎると、いきなりポリスの「Every breath you take」(1983年)のロック演奏になった。



図7: フェリシタス・ホッペ (声楽)、フローリアン・ホエルシャー (ピアノ)、フーベルト・スタイナー (エレキギター 世界初演: イリス・テル・シフォルスト (作曲) & フェリシタス・ホッペ (テキスト):
ここで実際に演奏されているのは? [ここで実際に演奏されているのは?]
2023年10月21日、ドナウエッシンガー音楽祭。PHOTO: SWR

かつてのノイエ・ムジーク愛好家たちの黒に黒のタートルネックというユニフォームが、快適な（そしてめったに求められない美しい）服装に姿を消して久しいとはいえ、シリアスさと陰鬱な呪縛が支配していた。それは、ジェシー・マリーノの「Murder Ballads」やマルティン・ブランドルマイヤーの「Zwischenspuren [Interstitial Spaces]」のような、どちらかといえば芸術的とは言い難い演奏に直面しても同様だった。彼は今年のカール・スクツカ賞の受賞者である（SWR はあらゆる臆心のルールを無視して自社制作を表彰した）。ブランドルマイヤーは、クリスティアン・モルゲンシュテルン（1905年）のような、柵の内側の隙間の生産的な利用（「建築家は隙間を取り出して / そこから大きな家を建てた」）という芸術的な一歩を踏み出すことはできなかった。聴き手は、「沈黙に祭壇を築く」（ヴォルフガング・シュトルツ）ハインリヒ・ベールの『Doktor Murke』（1955年）にあこがれた。とはいえ、10月19日の前夜祭を含め、20～22日の3日間、充実した内容であった。

コラボレーションの実験室、あるいは「分散型創造性」。

これは、ムジークターゲの新しい芸術監督によるところが大きい。リディア・リリングは以前、ルクセンブルク・フィルのドラマトウルクを務めており、前任者から7つの委嘱作品を「受け継いだ」一方で、2023年のムジークターゲを「分散型創造」という意味での共同作業の実践に捧げることを敢行することができた。ティム・ラザフォード＝ジョンソン（イギリス）に依頼したプログラムノートは、これを深く分析するのではなく、スケッチしている：「しかし、今年のドナウエッシンガー・ムジークターゲの共演者たちは、それを明示しているかどうかにかかわらず、自然界の生命を維持する植物、菌類、無脊椎動物、動物の間の自然なプロセスに似た、創造的な相互作用の古代の様式をコンサートホールに再現している。再生的で生命を肯定する、一種の音楽の再野生化である（ラザフォード＝ジョンソン）。注：少なくとも訳者は、昆虫も動物であることに気づくべきだった。（分類学では、原核生物、単細胞生物、バクテリア、植物、菌類、動物の6つの王国に区別される）。

パネルディスカッションも、知的な観点からは、このトピックにふさわしい内容を提供するものではなかった。コンサートではよりエキサイティングだった。ここでは、まったく異なる相互作用が見られた。これは、アンサンブル・アスコルタとソリストたちのように、対等な協力関係の中で起こることもある。タイション・ソーリー（ニューヨーク）のように、傑出した個性から生まれることもある。また、エリアン・ラディエグとキャロル・ロビンソンのオーケストラのための《オッカム・オセアン・サンクアンタ》のように、楽譜を完全に放棄することもある。1932年生まれの91歳になるエリアン・ラディエグは、もはや旅に出ることはできない。しかし、彼女の共著者であるキャロル・ロビンソンは、オーケストラ・ミュージシャンに楽譜を提供する代わりに、アコースティック・サンプルを持ってシュトゥットガルトに向かった。彼女はまず小編成でリハーサルを行い、次に連弾、そしてトゥッティでリハーサルを行った。本番中、音楽家たちは通知票を使うことを禁じられていた。そのため、初演では、キャロル・ロビンソンの腕の動きに超集中してついていき、マエストロという古典的なヒエラルキー像を無限大に誇張した。

この報告書が、ほとんど女性作曲家と演奏家の名前しか挙げていないのは偶然ではない。リディア・リリングは、ムジークターゲ100年の歴史の中で初の女性ディレクターである。23人中18人、つまり作曲委嘱の70%が女性である。同様に、ドナウエッシンゲで初めて経験する女性作曲家の割合も70%を超えた。このことを、単に男女平等という点での正義のキャッチボールとして捉えようとすれば、本末転倒である。実際、「共に働く研究室（colLABORation）」という考え方は、ヒエラルキー的・家父長制的構造の解消、すなわちすべての性別を含むフェミニズム的アプローチを意図している。発表され

た作品の多様性と質の高さにおいて、このセレクションはいずれにせよ得であり、図式化された男女比の産物ではない。



図 8: コラボレーション。ドナウエッシンゲン音楽祭 2023 のポスター。SWR

予想

ドナウエッシンゲン・ミュージックターゲに関するこのレポートは、ドナウエッシンゲン市文化局がこの催しで果たした優れた役割について言及することなしには終わらないだろう。

各公演会場間や、広く点在する宿泊施設までの無料シャトルバスに乗る（3交代制で10台のバスが運行）。すべてのコンサートホールのある荷物バスに乗る。イベント終了後やイベントの合間でも遅い夕食がとれるよう、地元のレストランを手配する。すべてを総合すると、音楽の日はアレマン・プロフェッショナルな方法で企画された。（休憩時間のコーヒー・テナントを除いては。彼は休憩のたびに喉が渴いた人たちの長い列を作った）。

17のイベントによる千三つの音色で満たされた6,500人の招待客は、それぞれの33の国へと旅立っていった。ノイエ・ミュージックはドイツ独自のものであるため、ゲストは世界のすべてのコインに戻ったわけではない。しかし、日本を含む広い範囲で愛好者を見つけた。

来年、ドナウエッシンゲンは日本の双子の町、上山市と鐘の音で結ばれる。南ドイツの小さな地方都市は、2024年のミュージック・デイズで再びノイエ・ミュージックの世界首都に変貌する。

翻訳: マティアス・テオドール・フォクト

図 9

アイリス・テル・シフォースト（作曲）＆フェリシタス・ホッペ（文）
 ここで実際に何が演奏されているのか？ 何が起きているのか？ 21世紀の二重伝記
 シンガー＝パフォーマー、ヴォイス、アンサンブル、2つのサンダーボルト / エレクトロニクスとサンプルの
 ための
 ブージー&ホークス 2023
 2023年10月21日ドナウエスキングー音楽祭にて世界初演
 著作権 シウトウトガルト・シュトヴェストルトフンク

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| フェリシタス・ホッペ（声楽） | フーベルト・シュタイナー（エレキギター） |
| サロメ・カンマー（声楽、演奏） | ボリス・ミュラー（ドラム） |
| アンサンブル・アスコルタ | ヴァネッサ・ポーター（パーカッション） |
| マルクス・シュヴィント（トランペット） | キャサリン・ラーセン＝マグワイア（演出） |
| アンドリュー・ディグビー（トロンボーン） | アイリス・ドレーゲカンフ（ドラマツルギー、舞台美術） |
| エリック・ボルギール（ヴィオロンチェロ） | |
| フローリアン・ホエルシャー（ピアノ） | |

0. Prolog

Hiermit, Sample-Punkte durch Donnerblitze ersetzt.
 Sample-Sätze F.H. durch die große Hornen (siehe auch bei F.H.3).
 alle Instrumente kein verändert. Sample-Punkte sind Spieler Punkte durch Donnerblitze ersetzt.
 Möglichkeit für diese Teil Stücke herzustellen, sei Pflanzten.
 Sprachlaut mit Überschrift auf englisch: "What's going on: the one part behind the scenes, dass beginnt
 Übersetzung englisch mit Fortgang der Musik.

Bläser minimalist phrasing auf Ten F. Trompete abwärts
 minimal wider und wider zurück

ruhiger Beginn mit Bläsern Harmonien gestalten. Eine modulieren durch unterirdischen LH Druck und Begleitlinie

oben weich im zutiefstendend gestützt langsam bedingt abwärts und zurück mit Whinnel!

immer mit Volume-Pedal verbunden

Stimme F.H. nur im PROLOG vom Beginn.
 Sänger: "was ist das eigentlich hier? durch große Hornen P.A. Gesamt Drama!"
 in englisch. Das ist immer zu verstehen ist.

Hier spricht Felicitas Hoppe

hinter, links von links.
 Sänger: "gerade könnte es durch beide Donnerblitze ersetzt" zu spielen.
 eine besondere zu haben beide "wieder"!

gerade klagen

hinter klagen

gerade klagen

Hiermit, Instrumental-Samples
 auf Tenor-Rhythmus ersetzen, minimal nach unten verschieben
 - Pro. T1_A4: Substanz
 - Pro. T1_A3: Dichter (für Takt 11)
 - Pro. T1_E3: Felicitas (ganz Prolog)
 - Pro. T1_A2: Punkte war. (durch Donnerblitz A1-ganz Prolog)

an weich wie möglich, eine harmonisierte Melodie mit letztem Punkt!

Mit zwei Superballen (groß klein) improvisatorisch das Geschehen begleiten. großer Superball erzeugt eher tiefe Töne. kleiner Superball eher höhere.
 am Rand und Töne sprachlich ist tiefer als in der Mitte. Durch Druck der Superballen wird die Dynamik beeinflusst. Zusätzlich kann das Pedal-Tönen
 während des Spielens der Töneblitze beeinflusst werden (jedoch etwas Effekte nur sehr sparsam einsetzen)
 weitere Töneblitze möglich zur Inspiration. Da die Punkte durch die Donnerblitze ersetzt sind, innerhalb des Spielens auf der Piste, wie die Donnerblitze
 reagieren und reagieren. Die Schritte sind unabhängig der Größeblitz Audio, mit Donnerblitzen zu eben, um Erfahrungen mit diesem Effekt zu sammeln.
 für ein markanter Stellen auf der Piste nicht durch die Blitze gestört.

durch Donnerblitz ersetzt

ganz weiche Schlägel wie eine Ten Fliche ohne Attacke

© 2023 by Bösser & Henkes - Bote & Bock, Berlin